

現代日本の
エッセイ

自己発見

湯川秀樹

湯川秀樹

現代日本のエッセイ

自己発見

毎日新聞社

自己発見

昭和四十七年十月一日 印刷
昭和四十七年十月十日 発行

定価 一〇〇〇円

著者 湯川秀樹

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 図書印刷

製本 佐久間製本

（検印省略）

© Hideki Yukawa Printed in Japan 1972

自己発見
目次

庭の構図

庭の構図

自己発見

乗合船

スウェーデンの思い出

ハドソン河畔の秋

祇園祭の印象

奥嵯峨の秋

南天の色づく頃

スピードの限界

少数意見

私の中の古典

日本の古典と私

四

四

三

三

三

七

三

六

五

九

七

源氏物語と私

三

きんもくせい

四

私の中の芭蕉

四

『近世畸人伝』

五

『東西遊記』

五

『山海経』の絵図を見て

六

老年期的思想の現代性

六

離見の見

科学文明の中の人間

七

人間の未来について

一〇六

核時代を超えて

一七

過密と過熱

二三

科学と自然

二五

離見の見

一七

今後の世界における創造

とは何か

三七

物理学者群像

物理学者群像

三七

対談 人間のおもしろさ

三〇

著者略年譜

三七

装幀 安彦 勝博

庭 の 構 図

庭の構図 —一九七二年—

私の記憶の中には、いくつかの構図がはっきりと定着しているが、一番のあざやかで、たびたび念頭に浮んでくるのは、ある一つの庭の景色である。それは三、四歳ごろから十二、三歳ごろまでの十年ほどを暮した家の庭の記憶である。それは絵巻物の中の絵のように、あるいはヘリコプターから撮った写真のよう、玄関の側の少し上の方から見た立体的な図柄になっている。向う正面に瓦屋根のある門がある。屋根の両端の瓦は桃の形をしている。門の中は土塀や板塀や玄関や内玄関^{ない}によって、四角に区切られた庭を形づくっている。この庭をへだてて門に向きあった玄関の右手に竹のひとむら、左手には丸く刈りそろえた柂^{ひいらぎ}がある。門に近く、左よりに桐の木が一本、立っている。この三本だけが、この庭の生きた植物である。

サンタヤーナの言葉を借りると、これは私にとって、「絵のような空間」であると同時に、この絵を追憶することが「センチメンタルな時間」を持つことにもなる。この門の外に立って、祭の行列がずっと向うの方から、だんだん近づいてくるのを待っている少年の時間であり、また、太い桐の木の幹に取りついて、一生懸命によじのぼろうとする努力の持続でもある。小学校から帰ってきた私が、門をはいって右手の内玄関の戸を開ける。すると家の中では、まだ学校にいかない、幼い末の弟が待っている。

この家も庭も、五十年近い昔に、道路の幅がひろげられた結果として、跡かたもなくなった。その後、戦争の末期に、この弟は戦病死してしまった。それらが、この追憶を、ますますセンチメンタルなものにした。

この絵の左側の土塀の向う側には裏庭がある。それが、私の記憶の中に、表の庭と同じくらい鮮明な、もう一つの構図として残っている。そこは、もっと広く、多くの木が茂っている。まんなかの空いたところに、夏は朝顔が咲き、秋は菊が咲いている。白いひげをはやした祖父がその向うに立って、水をやっている。そのまた向うに離れ座敷がある。夕食後、この離れの一室で、祖父が私に漢籍の素読をする。祖父は世間とのつきあいを完全にやめていた。人間や動物よりも草花の方がしたしみやすかったのであろう。私がちょうど五十歳になった時、少年時代と同じように、草木くさきのおい茂った庭のある家に住むことができるようになった。私の記憶の中だけに残された絵と、やや似たところのある構図が、現実になったのである。

移り住む庭ひろければ草木そうもくに

したしむ心 日々に深まる

自己発見 ―一九七二年―

人間はどうしたら創造的に生きられるのか、生き続けられるのか。私は自分に向って、こういう問いかけを、長年にわたって繰返してきた。この問いかけが始まったのは高校生のころからだったが、それに対して何ほどの自信をもって答えられるようになったのは、自分の能力や仕事に対する客観的な評価がある程度できるようになってからである。それより、さらに後になると、創造的に生きるということ、自分だけでなく、他の人々にも共通する問題として考えるようになってきた。

しかし、今になってふりかえってみると、もっと前から、私の心の奥で、もう少しちがった形での自問自答がなされていたように思われる。それは中学生のころまでさかのぼれる。最初の問いかけは「自分はいったい何者であるか。自分はいったい何をして生きてゆくべきか」というような形であった。それから今日までの間に、五十年の歳月が経過した。五十年前の私と今の私の間には、多くの点で、ひじょうに大きな隔たりがある。しかし、創造的に生き続けたい、そしてそのために、自分が何者であるか、自分の中にどのような可能性が潜んでいるか、何をして生きてゆくべきかを問い続けている、という点において、不変なるものの持続が確認できるのである。

別の言葉でいうなら、自己を発見することから始まって、次にはまた、もっと違った自己を発見する、

さらに後になってまた新しい自己を発見する。そういう発見ないし再発見を繰返すことが、前進でもあり、それが創造的に生き続けることを可能にしている。そういつてもよいであろう。

私にとっての最初の明確な自己発見は、自分が孤独な人間だと強く感じたこと、そのことであつた。それは中学の一年生の時のことである。

夏休みに学校から、三週間ほど海水浴に行った。百人たらずの生徒が、先生に引率されて、三重県の津市まで汽車に乗って行った。その中に私もまじっていた。市中の大きな寺の本堂に合宿して、毎日海岸まで歩いてゆくことになっていた。

着いた日の午後、「君たちの中の仲よし同士が、二人ずつ組をこしらえておきなさい」と、先生からいわれた。というのは、夜になると、蚊がでるので、かやをつる。その中には、敷きぶとんを二枚か三枚ならべてあり、一枚に二人ずつ寝ることになっていた。当時は男女共学ではなかったから男の子ばかりである。それで、夕方までに自分のパートナーを見つけておけ、というわけである。

友だちはみな、どんどん相手をきめていつているらしいのに、私だけは誰にもいいだしそびれていた。

また、誰も私に声をかけてこない。そうこうするうちに、夕方になってしまった。不幸にして生徒の数は奇数だった。ふとんを敷きだしたが、私の行き場はない。その時の何ともいえない悲しい気持が、今日まで消えずに、私の心の奥に残っている。

先生は、はんばになつた私のために、一人だけの幅の狭いふとんをもってこさせて、他の二組の生徒と一緒にのかやの中へおさめてくれた。

この小さな出来事が、あとになって考えてみると、その後の私の考え方、生き方に、相当な影響を及ぼし続けているように思われる。

父母、姉二人、兄二人、弟二人のほか、祖父が一人、祖母が二人もいる、大家族の中で育った。家も広かった。そういう私にとっては、家と庭とが、ほとんど自己完結的な小世界であった。それでも小学校時代には、友だちともよく遊んだ。それが先ほどの出来事があって以後は、学校から帰ると、家から外へでないで、いろいろな本を読むことで、おおかたの時間をすごしてしまふようになった。

もともとあった内向的な傾向が、急速に強くなっていった。自分とうまくつながらない外の世界、その中で孤独になった自分にいったい何ができるのか。この世の中でいったい何をして生きていったらよいのか。そんなことをだんだんと深く考えるようになっていった。小説なども、いろいろ読んでみた。文学の世界には確かに魅力があった。しかし、そこにも大人の世界のさまざまなわずらわしさが入りこんでいる。童話の世界のほうが、その点ではもっとよかった。

ちょうどそのころ、童話・童謡の雑誌「赤い鳥」が出だしたりしていた。それで一時は、童話作家になれたらいいだろうなどと思った。そうは思ってみても、そのころの私にとっては作文が大変な苦手であったから、作家になるなどとは、自分の適性に反した夢にすぎないと思いかえさざるを得なかった。

この夢があえなく消えた後、私の関心は文学書よりも哲学的な書物のほうに移っていった。それは中学の後半から高校の前半の三、四年間のことであった。しかし、文学少年が哲学青年になるのは、別に珍しいことではない。ここまできても、私はまだ自分が何者であるか、何者になりうるかについて、自信のある判断ができずにいた。ただ自分は結局、学者になるしかない、それも世間との交渉のできるだけ少ない

ような学問の分野に入ってゆくしかない、とは思いつけていた。

ところが、高校時代の後半になってから、私の興味は急に物理学にしばらくだした。それはひとつには当時、科学の先進地域であったヨーロッパで、物理学が激動の時代を迎えつつあることを知ったからであった。そこには、未知の世界が大きく開かれていた。数年後に自分が研究者として、この世界に入っていたら、何ができるのではないか。自分の適性もそれに向いているという、多少の自信もできつつあった。それよりも何よりも、物理学を研究するのは大いにロマンチックなことだ、と思ったのである。この気持は今もなお変わらない。

この自己発見は、私からいろいろな迷いを追いはらってしまった。大学へ入ってからの私の気持は安定していた。孤独な人間であるという気持自身が、自分の選んだ道を一人で歩くのだという青年期の気負いに変わりつつあった。ただし、まだ何事をも成就していなかった私には、「ついに無才無能にして、この一筋につながる」という芭蕉の言葉が、絶えず励ましとなっていたのである。

物理学の研究をロマンチックだと思いつけることは、私にとって創造的に生き続けることでもあるはずだった。しかし、毎日繰返される研究生活の中で、創造への飛躍といえるような出来事は、滅多に訪れなかった。

きょう、
今日もまた空しかりしと橋の上に

きて立ちどまり落つる日を見る

何日たっても何ヵ月たっても、ちっとも先へ進めない。今まで、これこそ自分の見つけた新しい真理だ

と思ひこんできたことに對しても、疑惑が頭をもたげたりする。そういうことを繰返し経験しながら、ある一つの考へに執着し続ける。いつたい何のためか。そこには確かに、ある期間内に何か業績をあげなければならぬ、というあせりもあつた。特定もしくは不特定の相手との競争意識もあつた。しかし、それらは一人の人を長期にわたつて、この一筋につなげる原動力とはなりえなかつた。

私の中にあつて、何十年にもわたつて、私を動かし続けているのは、未知の世界へのあこがれである。私にとつて、それは美しい世界であると期待されている。物理学者でない人たちにとっては、それは別に美しいとは思へぬ世界であるかも知れない。そしてまた、他の多くの物理学者にとっては、美しいかどうかなど、どうでもよいことかも知れない。眞実でありさえすればよいのかも知れない。実験と一致しさえすればよいのかも知れない。

そもそも何が美しいのか。科学の世界においては、はっきりしたきめ手はない。比較的少数の單純な、そして普遍性をもつ法則によつて規定される世界、という以上の的確な表現はないかも知れない。しかし、そんなら、科学以外の世界では、美の定義ははっきりしているのか。どうもそうではないらしい。芸術の場合において決定的なことは、それぞれのジャンルにおける、美に対する感受性があるかないかである。科学のいろいろな分野の中でも、理論物理学や数学などでは、やはり一種の美的感受性が無視できないのではないか。

もちろん数学の場合には、論理的整合性という条件が満たされていなければ、話にならない。さらに理論物理学ともなれば、事実の世界との一致ないし密接な対応が決定的な条件になる。それらは、どちらも

実に厳しい条件である。むしろ、そういう厳しい条件を満たそうとする人間の持続的な努力の結果として、たまさかに創りだされるものであるが故にこそ、新鮮な、そして鋭い美しさがそこに見出されるのであらう。

それはたとえば、童話の世界のような「甘美」と形容される美しさとは、確かに異質的な性格をもっているように見える。しかし童話の作家が傑作を生み出すには、やはり天分だけでなく、大きな努力も必要であらう。それに何よりも、童心がないといけないであらう。童心という中には、みずみずしい好奇心や空想力が含まれている。それらは科学者には不必要なものだと思われるかも知れない。有害であると思われているかも知れない。しかし私は、そういうことにかかわらず、いつまでも童心を失わずにいたい、と思っている。

そして近ごろは、物理学の研究をロマンチックだといつまでも思い続けていること自体が、童心のなせるわざであると思えてくるのである。それは中学生のころ、気まぐれにもせよ、童話作家になりたいと思ったことと無関係でないのではないか。こんな奇妙な想念が、このごろしきりに頭に浮ぶのである。